

またたき火をする。掘っている時間よりたき火をして
いる時間が長いくらいだから、トラックで運んだ木は
一日ももたない。

一か月くらいすると、監督がハラショーの合い図を
出す。次はコンクリート打ちだが、これも大変である。
トラックで運ばれて来た氷まじりの水をドラム缶の釜
で湯をわかす。砂を焼くため分厚い鉄板で釜をつくり、
湯気の出るほど砂を焼いた。漬物石のような大きなグ
リ石、湯気の出る砂、そして沸騰した湯とセメントで
コンクリートをつくり一輪車で基礎の中へ流し込む。
下手をして火傷する者もあった。

ソ連の基礎工事はどうして寒期に行うのだが、それ
は穴掘りをしたところが凍っていて土が崩れず、土ど
め板など要らないからだと気づく。四十人くらいでこ
の基礎工事が三か所でき上がった。

気温がプラスになるころには、一棟のブロック建て
の兵舎の形ができた。

四月下旬になると、丘陵地には枯れ木のごとく眠っ
ていた木々は一斉に芽を吹き、五月上旬には一面の新

緑となり、抑留の我らも心が和んでくる。

アカザという木の葉をセメント袋に詰め込んで、ラ
ーゲルへ持ち帰り飯盒でゆがき岩塩でもんで皆が食べ
た。野菜が全くないシベリアではビタミンC摂取の貴
重な方法であったし、また空腹をしのご季節的な良策
でもあった。

血気盛んなはずの現役兵の私だが、体力消耗が激し
く、虚弱者帰還したのは二十三年の夏であった。

ウラジオストク抑留四年

新潟県 風間 健次

千葉縣市川の通信隊で教育を受け、東京空襲を体験
の後、北支派遣軍の一員として渡支したものの転居先
の部隊はすでに南方へ転進、転々して北朝鮮の第七軍
司令部師団通信隊に到着したところで終戦を迎えた。

武装解除・興南港発八月三十日、ウラジオストク港
着九月一日。港の西北部山麓に関東軍の大天幕が二千

人収容所をつくっていたところに収容されたのが入ソ
第一歩となった。収容所から毎日百人くらい単位に班
を編成、建築、港湾荷役の強制労働の日々、身回り品
が検査と称する強制没収で次々となくなっていくた。
食糧事情は、荷揚げ作業の中で、要領よく隠して持ち
帰って炊事係に出しては食べるといったぐあい、困
ることはなかった。

電気技術があるということで、収容所各幕舎へ裸電
球を灯すための配電作業をシラカバの幹を電柱として
行うことが私の作業となった。

夏から秋を飛び越して冬の季節風が九月末ごろから
激しく天幕に吹きつける。付近の製材工作所から運び
込んだオガ屑を防寒材として幕舎内に張るように敷き
詰めた。零下四十度の寒気と港からの浜風が一体とな
っての寒さは耐え難いので、ドラム缶やれんがでつく
ったベチカのそばに身を寄せ合って寝込む冬の日が続
いた。一年半ほど経たころ、幕舎のオガ屑にベチカの
火が燃え移り、折りからの寒風にあおられ次々と各幕
舎に飛び火し三分の二ほどが焼失、幸いに怪我人はな

かったものの、翌日から四百人くらいに編成されて収
容所からどこかに連行されていた。歩哨が「ヤボン
ダモイ」と連呼していたところから、日本に帰ったの
でないかとうわさし合ったものの、信じるわけにはい
かない雰囲気であった。

残留組として電気作業をしていたら、所長から移動
命令が出た。徒歩で一時間くらい、港の西南部にある
火力発電所近くの収容所であった。私たちはウラジオ
第二収容所と呼称していた、人員四百人、労働大隊長
桜井大尉で、火力発電用の石炭荷役が主たる労働。船
が着くと夜も昼もなく強制労働が続くので、作業改善
を要求してのストライキが行われたが、間もなくゲー
ペーウーが来て桜井大尉をどこかへ連行していきスト
は中止となった。かわりに某少尉が大隊長となり、要
求の何%かは改善されて作業は続行された。

私は電気技術者としてブリキ技術者とともに班を編
成され、発電所内での電気営繕作業に従事、時折り所
長の個人引受けのソ連人住宅の営繕作業もかなたこな
たとやらされる毎日であった。ある日発電所内に突然

銃声が響いたので、その方向に飛んで行くと、溶接作業の仲間が一人胸部から血を吹き出して倒れていた。理由はわからないが歩哨と何かのトラブルがあったことに間違いない。死体は間もなくソ連人労働者によって所外に運び出され、トラッカの走音で消え去った。無情の悲愴が背すじを走った。

約一年間を第二収容所で過ごした私は、四人の仲間とともに移動することとなった。

行き先は港湾北部に繋留された一万トンくらいの貨物船収容所で、船名は「サマルカンド」と間もなくわかった。作業は電気関係の営繕作業で、船内には「沿海地方指導講習会場」のアーチが甲板に掲げてあり、毎日多くの各収容所からの仲間たちがアクチーブ教育のため出入していた。長兄定信と同級生であった同郷の猪俣氏と会ったのもこの甲板上であった。

波打ち返すあなたは家族の待つふるさと、夕陽沈む水平線を見つめながら尽きぬふるさとの話に時を忘れて語り合った。

隣の船は同じトン数の「サラトフ」号で、「沿海地

方楽劇団」の看板があり、歌、踊り、演劇の練習が行われていた。

だまされ続けた四年余月の印象は消えることはない。

望郷の果てに

新潟県 村岡 千代貴

北朝鮮の定平で終戦、武装解除となる。我が部隊は約二か月後、十月十三日、東京タモイという言葉にだまされ興南港から望郷の念一つで乗船した。十七日、ソ連ウラジオ港に入港している。見事に裏切られた。

翌朝、上陸、岸壁に沿って待ち受ける貨車へ、五十人一区切りに缶詰め状態のまま北に向けて進行だと耳にした。食事もほとんど配給のない囚人並みの取り扱いにはガックリした。十月二十日夕暮れ、ある土地に下車。話ではイマンという地名だった。当分この地でのラーゲル生活になることを自覚、部隊は応召や現役兵